

剣道と剣術の境界線 - スポーツ人類学的視点からのアプローチ -

佐藤 皓也 (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期課程)

現代剣道は、昭和 50 (1975) 年に制定された「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」という「剣道の理念」をもとに実施されている。そして、その技術は「剣道の理念」にある「剣の理法」に集約されると言われる。当時「剣道の理念」制定を行った委員において中心的人物であった範士九段小川忠太郎によれば、「剣の理法」とは「刀法、身法、心法」の 3 要素に分類される。またそれを基に剣道について彼は「刀法は正確な打突、身法は適法なる姿勢、心法は充実した氣勢」によって成立するものとしている (小川忠太郎, 1993, p. 14)。

ところで、小川は竹刀を日本刀とみなし剣道の根本理念を語る。すなわち、竹刀で打ち合う現代剣道においても、その本質には日本刀を前提とした思想が内包されているとしているのである。現在もこの思想は受け継がれており、実践者たちは剣道を他のスポーツとは異なる存在に位置する競技と考える傾向にあり、その考え方は剣道界において支配的といえる。たとえば、木寺も竹刀を刀として扱うことで、単なる競技スポーツであるはずの剣道が新たな (古くから) のカテゴリーに位置づけられ語られる様を指摘している (木寺, 2014, pp. 52-68)。小川や木寺の指摘からもわかるように、現代剣道は近世流派剣術との「連続性」を強く意識し、それゆえに存在していることにもなる。発表者はここで指摘される連続性を担保する「仕掛け (竹刀を刀と見立てる)」の背景に、流派剣術の「一刀」思想が強く影響していると考えている。上記の背景を踏まえて、本研究では「剣の理法」を読み解くために、現代剣道と伝承される流派剣術、双方の「勝負が決する瞬間」に注目し、まず、そこから剣道と流派剣術の境界を明らかにし、同時に双方に通底する根本思想を検証することになる。そこでは、伝承されている流派剣術において「一刀」がどのように伝承され、具現化されているのか、さらに、「一刀」に込められた思想とはなにかを読み解き、伝承される剣術が追い求めるものを明らかにし、結果として現代剣道との差異を浮き彫りにすることを目指す。尚、本研究は 10 年以上、現代剣道を実践している発表者がイーミックな視点から十分な参与観察と文献批判を行うことにより行われ、剣道と剣術が重要視してきた技法と心法の差とその共通性について探求する、これまでの武道論研究にはないスポーツ人類学的な視座に基づく研究となる。

